

【解説】日本新産種とはなにか

- 千葉県産標本の日本新産種について -

「日本新産種」とは、海外では知られている（名前がついている）生物だけれども、日本からは初めてみつかった生物種のことです。ちなみに「新種」とは、国際的な命名規約のもとにその存在を世界ではじめて明らかにし命名した生物の種のことです。視野が、前者は日本、後者は世界、というところが違う点でしょうか。

千葉県立中央博物館で管理しているデータベース（きのこ類）には、日本新産種の証拠標本が33点、24種が記録されています。そのうち千葉産の標本が証拠となった日本新産種は13種。どんなものがあるかということ、糟谷大河さんによるハマベダングコタケ *Bovista dryina* などのホコリタケの仲間が6種（文献1）、小林孝人さんによるモモイロアセタケ *Inocybe adaequata*（文献2）などアセタケ属が3種、長尾英幸さんによる *Peziza* 属が2種（文献3）、などがあります。中には、会員の矢代晶子さんが長柄町のきのこ栽培廃菌床からみつけて博物館に持ち込んだウラベニガサ科のトゲウラベニガサ *Pluteus magnus*も日本新産種でした（写真1、文献4）。

博物館に標本がはいっていないものは、今回の種類のように私の情報収集力がおおよそ拾えていない記録もありますので、千葉県からみつかった日本新産のきのこは、博物館記録の13種の他にもあるはずですよ（ごめんなさい）。

博物館の標本の中にも、分子系統の情報もあわせて調べた結果、10種くらいの日本新産種の候補が収蔵されていますが、論文などの報告が書かれ公開されるまでは日本新産種とよぶことはできません。

「千葉県新産種」ということを気にする分野もありますが、きのこの場合、千葉県産約700種のうち、博物館の活動が始まって千葉県から初めてみつかったものは400～500種程ではないかと思いますが、ちゃんと数えていません。

（吹春俊光）



トゲウラベニガサ *Pluteus magnus* McClatchie

（長生郡長柄町長柄山、2007年4月17日）

マイタケ栽培の廃棄培地放棄跡から発生したものを、会員の矢代晶子さんが採集し博物館に持ち込んだ。ひとめで珍しいと思われたので、ウラベニガサ属を調査していた、当時、札幌在住の竹橋誠司さんに標本を送ったところ日本新産種となった（文献4）。その後、米国のクラーク大学の研究者から貸し出し依頼があり、標本は米国へわたり、同定結果は大丈夫だと回答があった（2010年、おそらくDNA鑑定もされた）。日本では、この標本（CBM-FB-36790）しか正式には報告がなく、またGBIF（地球規模生物多様性情報機構）のサイトで検索しても北米のみの分布のようで、何らかのかたちで北米から日本に持ち込まれた可能性があり、千葉県きのこの外来種と考えられる（千葉県の外来生物、2012）。

【文献】

- 1) Kasuya, T. (2004) Gasteromycetes of Chiba Prefecture, Central Honshu, Japan. J. Nat. Hist. Mus. Inst., Chiba 8: 1-11.
- 2) Kobayashi, T. (1993) The species of *Inocybe* newly recorded in Japan. Trans. Mycol. Soc. Japan 34: 299-303.
- 3) Nagao, H. and Fukiharuru, T. (2000) Enumeration of the genus *Peziza* in Japan: *Peziza limnaea* and *Peziza rifaii*. Mycoscience 41: 269-273.
- 4) Takehashi, S. and Kasuya, T. (2009) *Pluteus magnus* and *Pluteus podospileus* f. *podospileus*, two agaric species new to Japan. Mycoscience 50: 74-77.